神様と退屈

腰痛と肩こりは表裏一体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様と退屈

【Ｎコード】
Ｎ４９６４Ｏ

【作者名】
腰痛と肩こりは表裏一体

【あらすじ】
ある世界には神様が居た。
神様は一万個の＜魂＞を創った。
神様はその中から適当に５００個選び、＜魂＞を＜人＞に変えた。
神様は５００人全員に特殊な能力と目印を付けておいた。

その後、残りの９５００個の＜魂＞も＜人＞に変えた。

しかし今度は能力も目印も付けなかった。

計一万人の＜人＞は世界中に散りばめられた。

数千年後、神様はゲームを始めた。

二人の日常

「・・・・ハァー退屈だ」

少年―野木原兼夜は授業中にもかかわらず、そんなことを呟いていた。

思っていたよりも声が大きかったのか周りの生徒がこちらを向いている。

「野木原。そんなに俺の授業は退屈か」

運悪く、先生にも聞こえていたらしい。

「いえいえ、違いますよぅ。聞き間違いですね」

「じゃあ何て言ったんだ？」

「・・・・・・・」

思い浮かばない。何も良いアイディアが思い浮かばない。

「そんなに廊下に行きたいのなら、素直に言ってくれればいいのにな」

「ちょっ！分かりました。謝ります。すいませんでした！！」

勇気をちょっと振り絞って言ってみる。しかし、

「そうか、そうか。素直で良いな。では廊下に行って来い」

という、有無を言わせない命令が返ってきた。

あまりにもヒドイ返答。

だが、これ以上言い返しても悪化するだけだと思い、教室を出た。

ようやく授業が終わり教室に戻り、席に着く。

「ハァー、散々だ……」

「ハッハッハ！野木原クゥーン、一体どうしたんだい？」

いきなり隣からテンションの高い声が降って来た。

顔を振り向かせると髪をサラサラとさせた親友・城田奈月［♂］が立っていた。

「黙れ奈月。殺すぞ」

「おいおい、何を物騒な事を言っているんだい。時代はラブ&ピースだよ」

「黙れ奈月。殴るぞ。顔面を」

「ひ、ヒドイ！この美顔を殴るですって！」

「黙れ奈月。魚顔の癖に美顔とか言うな。反吐が出る」

魚顔の一言でスイッチが入ったのか、いきなりラリアットがとんでくる。

「ああ危なっ！！何すんだよ！」

ギリギリのところで気づき、とっさにしゃがんで避ける。

「ウルセェ！！人が気にしていた事をあっさり言いやがって！」

「気にしてたのかよ！だったら自分で美顔とか言ってんじゃねェ！」

正しい事を言いながら兼夜は急いで教室の扉を開けて廊下を走る。

そのあとを追う奈月。

こんなふざけていた毎日が二人の日常だった。

日常？

ようやく放課後になり、帰路につく二人。

「つまりオレは思うワケだ兼夜。小説やアニメなどに登場するヒロインたちはカワイイから人気がある。裏を返せばブサイクなヒロインだったら人気はなくなると思うんだよ。もし性格が悪くてもカワイかったら特徴の内だが、性格が良くても外見がブサイクだとどんなに頑張ってもブスはブス。だからこそ・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

む、無理だ。オレにはコイツがなにを言っているのか理解できねェ・・・

元々二次元に興味が無い兼夜にとってはサッパリわからない。

それでも勝手に話つづける奈月。

「・・・・・要するにだ。女子は二次元でもリアルでも中身より外見。性格なんて放っておいてカワイイかどうかが問題なんだ！どうよ！！」

どうよ！じゃねーよ。

なんでお前はそんな誇ってんだよ。

しかも目ぇ輝かせながらこっち見てんじゃねーよ。

アレか！？感想でも求めてんのか！

無理だよ！オレには不可能だって！！

つーかお前オレがそういうの全くわかんないの知ってるだろ。

知ってるのに何故コイツはオレに語り掛けてきたんだよ。
一体どうしたいのか全っ然わかんねー・・・
って、いまだにこっち見てんじゃねー！！！
とりあえず「えっとぉー、まぁそうですね？」と曖昧に答える。
しかし、それは―ドン！！という爆発音のようなものに掻き消された。
「！？」
呆然とする二人。
「なんだったんだろ、今の・・・」
気が付いたら兼夜はそんなことを言っていた。
すると奈月は「よし。じゃあ行ってみるか！」と軽い調子で返してきた。
え？あきらかに危険なカンジだから警察が先だろと兼夜が言おうとしたが、奈月はすでに走っていたためしょうがなく追いかけていった。

事件

「ったく、アイツどこに行ったんうおっ！！・・・・・なにしてんのお前？」

そこにはゴミ箱の陰にうずくまる親友・奈月がいた。

「とりあえず黙ってコッチ来てしゃがめ。な？」

そう言う奈月は真剣な表情をしている。

状況が読めず言うとおりしゃがむ。

「で、結局お前は何してるわけ？」

「アレを見ろ、アレ。慎重に覗けよ」

指をさしている方をそっと見てみると、そこには人影が一つあった。

影の周りには瓦礫があり、炎が揺らめいていた。

邪魔なものがたくさんある上、距離が離れているため影の正体が掴めない。

「何アレ？誰？知人？１１０番に電話しなくていい？」

「俺が知るわけないだろ。まぁ、あきらかに危険そうな人だから今は様子見てんじゃん」

ふーん。いわゆるコウチャク状態ってやつですか。

まぁ確かにあんなアブナそうな人に真正面から立ち会うのも無理だからなぁ・・・妥当か。

そんな事を思っているといきなり人影がこちらに向かって歩いて来た。

「!?ややややヤベーよオイ!ちょっ、来たって!あいつコッチ来たって!」

「げ!!マジで!?どっか隠れるトコ無ぇか?無ぇな!」

慌てている間にも、影は近づいてくる。

やばい!ヤバイ!マズイって!!どーすんの、どーすんだよ!

もうすぐそこジャン!もう見つかるって!・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あり??

人影は無くなっていた。

「ねぇ、あのぉー、居なくなってるんですけどぉー」

答えを求め、奈月のほうを振り向く。

しかし、そこに居たのは漆黒のコートを身に包んでいる人物だった。

・・・ダレ?つーか奈月はドコ行ったんだ?そして目の前の人の右手に握られているものは何?なんかバチバチなってるけど。あ、もしかしてスタンガ—

―バチッ

短い音が響き、兼夜はその場に倒れた。

異変

「・・・・・・んー？」

どこだここ。

つーかオレ何してたんだっけ。

なんか全身がイテェうえに、頭がボーっとするんですけど。

だめだ、なんにもわかんねーや。

別にいいか。

「お、やっと起きたのか兼夜」

「あれ、奈月じゃん。居たのか。でさぁーここどこ？」

「保健室だよ保健室。わかりますか、ホケンシツ」

馬鹿にしてるよね。確実に馬鹿にしてるよコイツ。

普通一文で保健室って三回も言わないよね。

・・・・・・・・・・へ？保健室？あっ、だから見たことがあるようなカンジがするのか。

「いや待て。何故に保健室？」

「え、まさかお前覚えてないのか！？マジか！」

うるさいよ。保健室なんだから騒ぐなよ。他の人に迷惑でしょうが。

「覚えてねーよ。だから早く教えろよ」

「あ、ああ。それはあの、あれだ。授業中に倒れたんだよ。うん」

なんでそんなシドロモドロなんだよオイ。

「ふーん、そっすか。実感無いなー」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「お前、大丈夫か？顔真っ青だぞ」

そう言われた奈月は確かに顔が青ざめていて、脂汗もかいていた。

「だ、ダイジョブだって。兼夜だって倒れてたんだから休めよ。もう授業も終わったことだし」

「あ、もう授業終わってんの？それを早く言ってくれよ。だったらオレ、すぐ帰るけど奈月は？」

「あーワリ。ちょいセンコーに呼ばれてるから」

奈月、奈月よ。目がザッブンザッブン泳いでるぞ。

見え見えの嘘ついてんじゃねえぞ。

なんで嘘をつく必要がある？

さっきの様子も何か変だったけどこれは本格的にヤバイんじゃね？

だとすると・・・・・・

「じゃあオレ、帰るわ」

「ああ、また明日な…」

保健室を出て、スリッパから靴に履き替える。

カバンを背負い自宅の方向に歩き出す。からのぉー・・・・・

「ユーターンダッシュッ！！」

その場にカバンを捨て、兼夜は再び学校に向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4964o/

神様と退屈

2010年12月10日20時25分発行